

第7章 昨年度のモデル事業参加企業における MFCA の活用状況

7 - 1 . MFCA 研究会の開催

MFCA 導入後の MFCA 分析結果の活用方法、および MFCA の継続的な運用方法などを検討するため、2005 年 12 月 2 日に大阪で MFCA モデル事業研究会を開催した。

昨年度（平成 16 年度）のモデル事業参加企業のうち、松下電器産業株式会社、グンゼ株式会社、ホクシン株式会社、ジェイティシイエムケイ株式会社、四変テック株式会社の 5 社が集まり、MFCA の活用状況を報告し、今後の課題等についての討議等を行った。

この研究会には、上記企業 5 社の担当者のほか、MFCA 委員会の國部委員長（神戸大学大学院）、中島委員（関西大学）、導入支援を行ったコンサルタント 3 名が参加した

研究会参加の 5 社は、いずれも昨年度のモデル事業に参加した企業である。松下電器産業株式会社は、このモデル事業に参加する以前に、MFCA の導入実績がある。またグンゼ株式会社は昨年のモデル事業に、3 つの事業所でモデル事業に参加した。

7 - 2 . 昨年度のモデル事業参加企業の MFCA 活用状況

(1) MFCA のメリット(全般)

MFCA の効果について、各社ともに、物量センター（工程）毎にマテリアルの流れを捉え、マテリアルコストだけではなく、システムコストも含めて、正のコスト、負のコストを算定することで、環境面、コスト面双方の改善活動に展開しやすいとしている。従来から行われている設備稼働率管理、歩留管理、不良率管理などを、コストという視点で統一した尺度で見ることにより、より効果的、総合的なマネジメントを行っている。

四変テック株式会社では、チョコ停の管理をコストと結びつけることによって、改善が進んだとしている。

松下電器産業株式会社では、今後、中国など海外工場において、MFCA の計算、分析結果が生きていくとしている。

(2) 年度の環境目標、コストダウン目標に取り込む

MFCA 導入の 2 年目に当たり、各社でそれぞれの工夫が見られる。

そのひとつとして、ジェイティシイエムケイ株式会社から、年度の経営目標に MFCA の計算結果を組み入れている事例が報告された。ISO14000 の年度目標に、製品単位当たり負のコストの低減を掲げて、目標の展開を行っている。

ホクシン株式会社でも、年度のコストダウン目標に負のコストの低減を掲げ、月次でそ

の進捗および成果の管理を行っている。

(3) 継続的な月次の MFCA 計算

モデル事業の MFCA 計算では、モデル製品のモデル月の MFCA 計算を行っていることが多いが、これを毎月行うことにより、工場の日常管理ツールとして活用を志向している。

グンゼ株式会社では、事業所によって活用の重点は異なるが、ある事業所では、簡易的な MFCA 計算ツールを開発し、月次の MFCA 計算を行っている。さらに同種の製品を生産している各課での比較ができるようにしている。

また、ジェイティシイエムケイ株式会社でも月次の MFCA 計算を行い、別途設定した年度の改善目標に対する各工程の進捗管理に活用している。

(4) 設備投資などの経営判断に活用

設備投資の投資採算計算を行う際に、マテリアルコストだけではなく、システムコストを加えたメリット計算ができるため、設備投資の採算計算に MFCA 計算を活用している。

グンゼ株式会社では、設備投資の効果のシミュレーションを行う際に MFCA の数値を活用した。また、ホクシン株式会社でも MFCA 計算を取り込んで、設備投資計画の見直しを行っている。

さらに、各社で新工場建設や新製品開発に MFCA 計算結果を活かす検討が行われている。

(5) モデルから実践へ

MFCA モデル事業参加から 2 年目の各社のディスカッションの中で、MFCA の今後の活用の方向性が見えてきた。各社の工場のマネジメントの特性により、どのような部分に MFCA を活用するかが変わってくると思われる。

生產品種や、日々の工場の状況により、材料歩留まりや、不良率、稼働率の変動が大きい工場では、MFCA を月次、週次等のサイクルで継続的に適用し、MFCA を使った“原価維持（原価管理）”を行うのが有効である。

それに対して、日々の歩留まり、不良率、稼働率等が安定しているような工場では、MFCA 計算を短サイクルで行う必然性はあまりなく、設備投資計画や、年度の改善計画立案の際に MFCA 数値を活用するところに重点がおかれる。

これらふたつの取り組み方は、MFCA の“原価改善”と“原価企画”への活用である。